

親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究(1)

松田君彦・児嶋晃代*

(2002年10月15日 受理)

A Study on Types of Parent Scolding Utterances and Children Acceptance Process. (1)

Kimihiko MATSUDA・Akiyo KOJIMA

要 約

子どもは、普段からの親の自分に対する態度や関わり方からいろんなことを感じ取っており、日常の“叱られる”という場面でちょっとした叱りことばの違いに敏感に反応しているといえる。本研究は、親の用いる“叱りことば”をいくつかのタイプに分類し、どのような叱り方が子どもに受容されやすいかということ、さらには、親の自分に対する日頃の関わり方を子ども自身がどのように認知しているかによって、同じ叱り方でも受け止め方に違いが見られるのではないかということを探ることが目的である。結果としては、「人格評価」や「突き放し」といった叱り方は子どもに反発感情を生じさせるが、親との信頼関係の有無が重要な媒介変数であることがわかった。

キーワード：親の叱りことば、叱り方のタイプ、親子関係の認知、反省と受容

序 論

1. はじめに

最近、自信を持って子どもをほめ、叱ることのできる親や教師が少なくなってきたといわれる。これは一つには、叱る側である大人の価値観の変動に原因があると考えられる。マスコミは情報を氾濫させ、次々に異なった情報をわれわれに流してくれる。「いったい、何が正しくて、何が正しくないのか」に関して、おとな自身が価値基準を確立するのが大変困難な時代のように思われる。

*現在、曾於郡輝北町立高尾小学校教諭

また一方では、叱られる側である子どもの方にも異変が現れている。物質的な豊かさに伴って耐性の育ち難さが指摘されてきたが、親や教師に叱られて逆切れし、かっとなって親や教師に暴力を振るったり暴言を吐く子どもが増えているという。要するに、叱られることに対する納得や自省のプロセスが希薄化しているのである。

子どもを「ほめる・叱る」という行為は、単なる賞罰ではなく、親や教師から子どもへの一つのコミュニケーションであると考えることができる。コミュニケーションの受け手である子どもに情報（親や教師が伝えたいと思っていること）が正確に伝わるためには、言葉の理解をはじめとして、善悪の価値判断など受け手側の心理的成熟のレベルを考慮することが重要になってくる。なぜなら、もし相手に理解できない情報を与えて、相手が自分の意図した行為をしないからといって叱る場合、与えた側の一方的な一人相撲に終わるだけではなく、場合によっては子どもの成長や性格までもゆがめる結果にもなりかねない。そして、何より大切な子どもとの信頼関係を壊してしまうことさえある。

2. “叱り”の研究概観

1) “叱り”効果の認知的要因

「ほめる・叱る」を賞罰として捉えてその効果を調べる研究は、基本的にはS-R理論に基づいて、躰を物理的要因の関数として考えようとするものが多かった。たとえば、賞罰の強度や与えるタイミングなどを独立変数とし、即座の子どもの行動変化を従属変数として、どのような賞罰の与え方が最も効果的であるかを探ろうとしていたのである。しかしこれらの研究は、子どもの認知を考慮に入れていなかった。

Park (1970) は、物理的要因とは無関係に罰の根拠を子どもに明示したときには、そうでない場合に比べて、望ましくない行動の制止効果が大きいという結果を報告している。この研究は、当該行為がなぜ非であるのかということについての子どもの認知が、子どもが自らの行動を制御するさいに重要な意味を持っているということを示唆している。

「ほめる・叱る」というコミュニケーション場面には、種々の要因が複雑に絡み合っていることから、これまでその実証的研究が躊躇される傾向にあった。たしかに、「叱る」、「ほめる」は表情、しぐさ、言語表現、口調、など様々なものを媒介にしてなされる情報伝達行為であり、多かれ少なかれ、それらすべてが受け手の認知要因となる。しかし、伝達される情報量の多さと確かさの点で言語表現はことのほか重要であり、「叱る」という行為においてもそれはあてはまる。叱ることは、相手または相手の行為に対する拒否やその程度を示すだけではなく、叱り手の“望ましい”と考える方向に相手の態度や行為を調整し、究極的には、こうなってもらいたいという抽象的な価値を伝える目的を持っているからである。

竹内・三宮・遠藤 (1990) によると、対教師感情の善悪によって、叱られ手の受け止め方が変わってくる叱りことばもあるが、受け手の反応には、単に教師に対する感情だけでなく、それぞれ

の叱りことば固有の要因が影響していた。

また、遠藤・吉川・三宮（1991）によれば、叱りことばの表現パターンは、命令形で子どもの行為を指示し、直接的に親の意図を表現するもの（「～しなさい」「～するな」など）や、子どもの行為の善悪には直接言及はしないが子どもの人格を評価したり（「～な子だ」）、問いただしたり（「どうして～するの」）して、間接的に親の意図を表現するものなど、14パターンに分類される。そして、この叱りことばの表現パターンが異なると、受け手の話し手に対する反応も変化した。

藤田・丸野（1992）によると、叱り手の意図を正確に読みとることが、必ずしも叱られた行為の修正につながるとは限らないのであり、母子間の情緒的な関係の安定性に関する子どもの信念が、子どもの反応に影響していた。特に叱りことばのように、叱り手の感情が明確に表現される場面では、叱り手の真の感情、あるいは叱り手と受け手の情緒的な関係を、子どもがどう認知するかという側面が非常に重要であるということが示唆された。

2) 学校場面での“叱り”研究

学校場面において教師—子ども間の叱りは、日常的によく見られる。叱り手である教師は当然、叱るという行為を通して子どもの望ましくない行動を改善したいという思いからそうするのである。しかし、そうした思いとは裏腹に、教師の叱りが効果を持たない場面も往々にして見られる。

竹内・三宮（1990）は、「同じことについてそれぞれ違う叱りことばで叱った場合、子どもが叱り手である教師をどのような人間であると受け止めるか」という研究を行い、次のような結果を得ている。教師から厳しいことばで叱られたグループの子どもはその教師に対して悪い感情を抱き、その教師から再び叱られた時に「叱った相手が先生だから言うことは聞くが、反省はしない」という反応を示した子が全体の30%を占めたということである。このことは、教師が子どもを叱り、その後、表面的には子どもの行動は改められたわけだが、心の中では「叱られるのがいやだからそのような行動をしない」のであり、「教師という権威に服従するが、心の底から自分の行動を反省するのではない」ということを意味しているようである。

それでは実際、教師から叱られたとき、子どもはどのように感じているのだろうか。教師に対して良い感情を持っている児童とそうでない児童では、同じことについて教師から叱られたときに、それぞれどのような受け止め方をするのだろうか。竹内・三宮・遠藤（1990）は、授業中のおしゃべりを教師から次のような5つの叱りことばで叱られたとき、それぞれどのような気持ちになるかを評定させている。①「静かにしなさい」（直接表現）、②「そんな態度だとどれだけ人の迷惑になるか考えてごらん」（セルフコントロールの要求）、③「通知票に書いておくからね」（権威的脅し）、④「何度いってもわからない子だね」（人格評価）、⑤「そんなに言うことがきけないなら勝手にしなさい」（突き放し）。

竹内ら（1990）によると、叱りことば①については、教師に対する感情が良い子どもでもそうでない子どもでも差が見られなかった。これはやめて欲しい行動に対して、直接そのことをいう、いわゆる直接表現としての叱りである。このような叱り方に対しては、教師に対する感情とは無関係に、素直

に受け止める場合が多いということであろう。また、叱りことは③では、教師に対する感情の好悪とは関わりなく、双方から嫌われる叱り方であった。叱りことは④と⑤については、教師に対する感情の好悪によって受け止め方に差が見られた。児童が、叱り手である教師に対して良い感情を持っている場合、叱り手である教師の叱り意図を善意に解釈する。ところが、叱り手である教師に対して良い感情を持っていない場合、叱り手の意図を悪意に解釈する傾向が見られた。これらのことから、子どもの教師に対する感情のいかにかわらず、「通知票に書いておくからね」などの権威的脅しは用いるべきでないこと、逆に望ましくないと思われる行動に対する直接的な禁止は、教師に対する感情にかかわらず素直に受け止められること、さらに、教師に対する感情の違いによっては、受け止められ方の違う言葉があることがわかった。

それでは、子どもの教師に対する感情はどのようにして形成されていくのだろうか。子どもは教師の叱り行動を、その教師がどんな人間であるかを知る大きな手がかりとしているものとおもわれる。竹内・三宮(1991)は、よく知らない教師から特定の場面で何度か特定の叱られ方をしたときに、その教師がどんな教師であると思うかについて調査したところ、次のような結果が得られた。

厳しい叱り(子どもにとって、受け入れにくい叱り)を教師から受けた子どもたちは、叱り手である教師に対してあまりよい感情を抱かず、たとえばその教師が「勉強の教え方がうまいかどうか」や「テストや通知票にこだわるかどうか」といった、叱りとは直接関係ないと思われる教師属性についても悪く評価する。それに対して、教師からやさしい叱り(子どもにとって受け入れやすい叱り)を受けた子どもたちは、その教師に対してよい感情を抱く。つまり、どのような叱り方をしたかで、その叱った教師に対する子どもの感情や人格評価といったものが形成されていくのである。ただし、厳しい叱り方をした教師でもやさしい叱り方をした教師でも、同じ程度に高く評価された項目として「熱心さ」があげられる。子どもを叱ってくれる教師は、叱り方にかかわらず熱心であるとも受け止めているのである。

さらに、叱りを受ける前と後での反省感情の変化に関しては、厳しい叱りを受けた子どもたちは叱られる前より叱られた後のほうが反省感情は低下する。つまり、叱られたことによって反省感情は弱まるのである。逆にやさしい叱りを受けた子どもたちは、叱られた後の方が反省感情は上昇する。

2) 叱りことばがもつ意味

ことばは、叱りの受け手の立場やその場の状況・叱り手と叱られ手の人間関係などにより、さまざまに解釈される可能性をもつ。褒められたり、叱られたりする場合も同じである。せっかく褒められても、「おだて、ご機嫌取り」と解釈すれば素直に喜べない。また、叱られたとき、相手がただ単に「攻撃した」と解釈すれば反省心も湧いてこない。褒められるときもそうだが、叱られる場合にはとりわけ、叱り手が「どういうつもり(意図)、どんな気持ちで」叱ったのかについての認知が、叱られ手の反応を大きく左右すると考えられる。叱られ手は叱り手のことばの意味だけが理解されるのではなく、そのことばに含まれる微妙なニュアンスを感じ取り、そこに叱り手の意図や

気持ちを見出すのであり、なぜ叱られたのかという叱られた原因のみならず、叱り手がどんなつもりで自分を叱ったのかという叱り手の意図や感情に対しても、極めて敏感に反応しているのである。

従って、ある叱り方が叱られ手にとって納得できるものとなるためには、叱られた原因について納得できるだけでなく、叱る側の意図や感情についても納得できなければならない。たとえ、叱られたこと自体は適切と受け取れる状況でも、叱り手の意図や感情が不適切と認知されれば、その叱り方は受け入れられずに効力を失うであろう。

叱りそのものの目的は、その場しのぎの行動修正ではなく、今後の子ども自身による適切な判断と行動調整を促すことにあるはずである。その場しのぎの行動調整ならば、親や教師の権威をふりかざし、愛情の剥奪や保護の打ち切り・成績の操作などの罰を持ち出して脅すのが極めて効果的かもしれない。しかし、子ども自身が自分で考え、行動を変容させるように動機づけたいのならば、こうしたやりかたは逆効果であるし、子どもとの間に信頼関係も生まれえない。そして、叱り手の側にそんな意図がなくても、叱られ手にそう誤解させてしまえば、やはり同じ事態になるということ忘れてはならない。褒めにせよ叱りにせよ、子どもがどう受け取り、どう感じるかという点を抜きにして考えることはできない。

本 論

【目的】

竹内ら（1989, 1990）によると、同じ状況下でも、叱りことばの違いが反省感情や教師認知に影響を与えるところが示唆され、また、遠藤ら（1991）の研究では、親が子どもを叱るときに用いる様々な表現パターンについて分類が試みられているが、その結果、「望ましくない行為の禁止」（やめなさい）、「望ましい行為の実行要求」（勉強しなさい）、「望ましくない行為の指摘」（また勉強をさぼっている）、「想起」（前にも言ったでしょう）、「望ましくない理由の説明」（成績が下がるでしょう）、「罰の予告」（押入に入れるぞ）、「望ましくない行為の逆説的指定」（勉強したくないならするな）、「子どもの人格に対する評価」（だらしない子だ）、「突き放し」（もう好きにしなさい）、「問いただし」（どうして勉強しないの）、「話者の不快感の表明」（がっかりした）、「悪態」（バカ）、「世間体意識」（ご近所に笑われるよ）、「その他」（おれの子だったらもっとできるはずだ）の14パターンが抽出されている。さらに、それぞれの叱りことばに対する子どもの反応も、受け手が自己の非を認めており、反省の感情も含まれた「受諾反応」、受け手が叱り手の非難に対して拒否、悪態、反抗などを示す「反発反応」、受け手が自己の正当性を主張したり、弁解したりする「主張反応」、受け手が行為を延期したり黙ったりする「受け流し反応」に分類された。しかし、ある叱りパターンに対して、すべての子どもが同じ反応をするとは限らない。

また、藤田・丸野（1992）によると、叱りことばの伝達過程においては、叱り手の真の感情、あ

るいは叱り手と受け手(子ども)の情緒的な関係を、子どもがどう認知するかという側面が非常に重要であるということが示唆された。

本研究では、叱られる側の子どもの認知に焦点を当て、小学校高学年の子どもの対象に調査を行う。まず、よく自分のことを叱ったり注意したりするほうの親について、その親の自分に対する養育態度を子ども自身がどのように捉えているかを調査する(親子関係)。自分の親をどのように捉えているかによって、親からの叱りことばの受け止め方にどのような違いが見られるかを検討するのが本研究の目的である。

【方法】

調査対象：鹿児島市内の公立A小学校 5年生(103名)、6年生(94名)

調査期日：1998年9月15日～9月23日

調査場所：児童が所属する教室

調査材料

(1) 親子関係：TK式新親子関係診断検査の中から、「支配(厳格)・(期待)」,「拒否(不満)・(非難)」,「保護(心配)・(干渉)」の各領域から8項目ずつ、計48項目に対して4件法での回答。

(2) 親の叱りことばに対する子どもの反応の測定

場面：遠藤ら(1991)によって得られた“よく叱られる場面”の中から、特に子どもが直面するであろうと思われる「勉強をしなかったとき」,「嘘をついたとき」,「部屋の片付けをしなかったとき」,の3場面を選択し、単純な線画で描写した。

叱りことば：遠藤ら(1991)によって収集・分類された「叱りことばパターン」の中から、特に反発反応、受諾反応が多くみられた「望ましくない理由説明」,「子どもの人格に対する評価」,「突き放し」,「話者の不快感の表明」,「望ましい行為の実行要求」,「問いただし」の6パターンを用いた。

6パターンの叱りことばを前述の線画と組み合わせ、P-Fスタディを模した図版を全部で18枚作成した。それぞれの叱りことばで叱られたとき、叱られた子どもはどのように感じると思うかについて7件法で回答を求めた。

調査手続き

(1), (2)の質問紙を合わせたものを配布し、両方に対して、自分のことをよく叱ったり、注意したりする親一人を念頭に置いて回答するように教示した。また、(2)の質問紙については全部が同じ並びにならないようにランダムに配置した。

結果の処理

TK式新親子関係診断検査の結果の処理について。危険群・安全群の判断基準は、母親についての基準点の方が厳しかったので、すべて母親についての基準点を使用した。

親の叱りことばに対する子どもの反応は、3場面の得点を合計し、それを反発度得点とした。

【結果および考察】

1. 拒否（不満）

TK式新親子関係診断検査における不満危険群・不満安全群と、叱り方6パターン（理由説明・人格評価・突き放し・感情表出・望ましい行為指定・問いただし）の各組み合わせごとに、人数・反発度の平均得点・標準偏差を表示したのがTable 1である。

Table 1 拒否（不満）における叱り方に対する反発度の平均得点と標準偏差

		叱り方					
		理由説明	人格評価	突き放し	感情表出	望ましい行為指定	問いただし
危険群	人数	37	37	37	37	37	37
	平均	11.11	12.65	13.16	11.76	11.68	11.84
	S D	3.53	4.14	4.44	3.84	3.64	3.49
安全群	人数	132	132	132	132	132	132
	平均	9.28	11.11	10.55	8.66	10.25	10.01
	S D	3.24	3.91	4.50	3.71	3.42	3.14

各平均得点について、2(不満危険群・不満安全群)×6(叱り方)の2要因分散分析を行ったところ、Table 2にあるように親子関係 ($F = 12.818$, $df = 1/165$, $p < .001$) と叱り方 ($F = 11.953$, $df = 5/825$, $p < .001$) の両要因で主効果がみられ、また、その要因間にも有意な交互作用がみられた ($F = 2.373$, $df = 5/825$, $p < .05$)。

Table 2 拒否（不満）における分散分析表

要因	df	平方和	平均平方	F 値
親子関係(A)	1	722.26	722.26	12.83***
個人差(S)	165	9297.15	56.35	
叱り方(B)	5	323.78	64.76	11.95***
A × B	5	64.27	12.85	2.37*
S × B	825	4469.65	5.42	

* $p < .05$ *** $p < .001$

そこで、各要因の単純主効果を分析したところ、叱り方のすべてのパターンにおいて、不満危険群の方が不満安全群より反発度得点が高かった。(理由説明では $F = 8.777$, $df = 1/165$, $p < .01$,

「人物評価」では $F = 4.150$, $df = 1/165$, $p < .05$, 「突き放し」では $F = 9.858$, $df = 1/165$, $p < .01$, 「感情表出」では $F = 19.643$, $df = 1/165$, $p < .001$, 「望ましい行為指定」では $F = 4.653$, $df = 1/165$, $p < .05$, 「問いただし」では $F = 9.079$, $df = 1/165$, $p < .01$ 。一方、不満危険群においては、「突き放し」が他のいずれの叱り方パターンより5%~10%の有意水準で反発得点が高かったが、不満安全群では「人物評価」や「突き放し」が「理由説明」や「感情表出」, 「望ましい行為指定」などより有意に反発得点が高かった。

以上の結果を図示したのが Fig. 1 である。

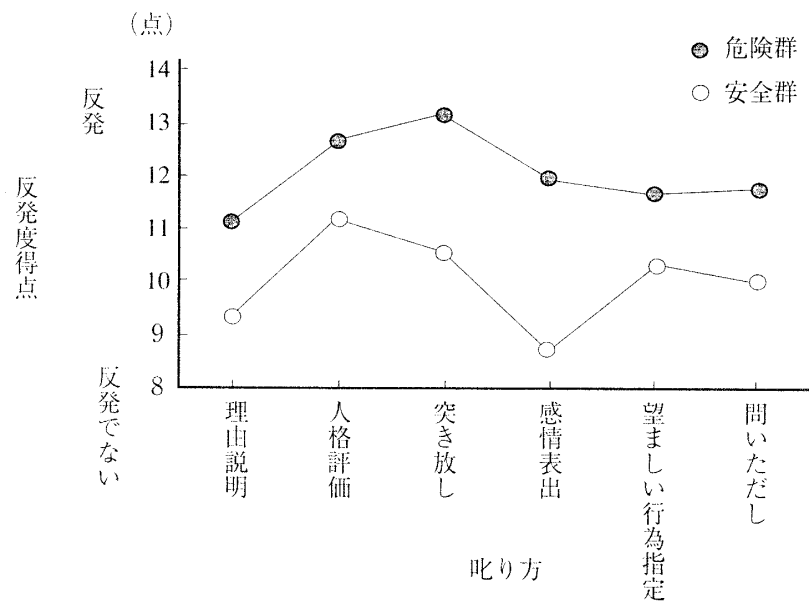


Fig. 1 親子関係と叱り方の違いが反発度に及ぼす影響—拒否(不満)

拒否(不満)とは、「子どもとしっくりいかない」、「子どもに対して不満がある」、「ムシが好かない」、「他の兄弟と比べてかわいくない」、「子どもに対して無関心」、「子どもの相手になってくれない」といった態度で親が自分に接していると子ども自身が受け止めているということである。

すべての叱り方において、親子関係における不満危険群のほうが不満安全群よりも反発度得点が高いということは、親が自分のことを不満に思っていると感じている傾向が強いほど、親からの叱りに対して反発心を持ちやすいことを意味している。親からの叱りがたとえ子どもに対する愛情から発したものであったとしても、子どもはそのようには受け取らず、むしろ自分に対しての不満をぶつけられていると感じ取ってしまうのであろう。

特に「感情表出」においては、両群間の差が顕著 ($p < .001$) である。「感情表出」は、子どもの望ましくない行動を親が残念に思う気持ち、または悲しく思う気持ちをストレートに表現する叱り方であるが、親が自分のことを不満に思っていると感じている子どもには、親のそのような気持ちが素直には通じにくいようである。

不満危険群では、叱り方に対する反発得点が高いのは「突き放し」であり、他のすべての叱

り方との差が有意であった。「突き放し」とは、表面上は「これからは（親は何も言わないから）自分の判断で行動しなさい」という許可をも含む言い方であるが、同時に親としての保護や援助をうち切ることも含意しており、その意味で親子間の精神的結びつきや、子どもの親に対する依存関係を操作して、子どもの行動の変化を期待する叱り方であるといえる。親が自分のことを不満に思っている・自分の愛情を拒否されていると感じている傾向が強い子の場合、この叱り方を、自分に対する拒否そのものであると受け取り、反発心を高めてしまうのではないかとと思われる。

一方、叱り方に対する反発度得点が低かったのは、不満安全群では「感情表出」であるのに対し、不満危険群では「理由説明」であった。「理由説明」とは、子どもの行為がのぞましくないと親が判断した理由・根拠を説明する叱り方である。親が自分のことを不満に思っている・自分の愛情が拒否されていると感じている傾向が強い子どもの場合、親としての保護や援助をうち切ることが含意されているような叱り方や、自分の人格を悪く評価されるような叱り方は、ますます自分が親から嫌われていると感じてしまいがちであると思われる。それよりも、叱られている理由が明らかにされるような叱り方によって、「いま自分が叱られているのは、親が自分を嫌っているからではなくて、自分の行為自体がいけなかったからなのだ」ということが明らかに分かることが、反発心を低めているのではないかとと思われる。

2. 拒否（非難）、支配（厳格）、支配（期待）

TK式新親子関係診断検査における上記の三領域に関しては同じような結果が得られたのでまとめて考察する。

まず、拒否（非難）について非難危険群・非難安全群と叱り方6パターンの各組み合わせごとの人数・叱り方に対する反発度の平均得点・標準偏差を示したのがTable 3である。

Table 3 拒否（非難）における叱り方に対する反発度の平均得点と標準偏差

		叱り方					
		理由説明	人格評価	突き放し	感情表出	望ましい行為指定	問いただし
危険群	人数	39	39	39	39	39	39
	平均	11.41	12.66	13.03	11.28	11.95	11.69
	S D	3.74	3.96	4.75	4.44	4.42	3.65
安全群	人数	104	104	104	104	104	104
	平均	9.40	11.10	10.59	9.18	10.30	10.30
	S D	3.17	4.03	4.38	3.59	3.24	3.11

各平均得点について、2（（非難危険群・非難安全群）×6（叱り方））の2要因分散分析を行ったところ、Table 4に示すように親子関係（ $F=9.972$, $df=1$ 137, $p<.01$ ）と叱り方（ $F=9.378$, df

=5 685, $p < .001$) の両要因に主効果がみられ, 交互作用はなかった。

Table 4 拒否 (非難) における分散分析表

要因	df	平方和	平均平方	F 値
親子関係(A)	1	562.27	562.27	9.97***
個人差(S)	137	7724.36	56.38	
叱り方(B)	5	284.44	56.89	9.38***
A × B	5	16.46	3.29	0.54
S × B	685	4155.36	6.07	

* $p < .05$ *** $p < .001$

拒否 (非難) とは, 子どもを脅かしたり, 悪くいたり, 体罰やその他の罰を与えたりなど, 親が子どもに対して荒っぽい非難の態度で接している, と子ども自身が受け止めているということである。

次に, 支配 (厳格) に関して厳格危険群・厳格安全群と叱り方の 6 パターンの各組み合わせごとの人数・叱り方に対する反発度の平均得点・標準偏差を示したのが Table 5 である。

Table 5 支配 (厳格) における叱り方に対する反発度の平均得点と標準偏差

		叱り方					
		理由説明	人格評価	突き放し	感情表出	望ましい行為指定	問いただし
危険群	人数	72	72	72	72	72	72
	平均	10.67	12.21	11.94	10.28	11.54	11.26
	S D	3.31	3.91	4.43	3.98	3.61	3.32
安全群	人数	93	93	93	93	93	93
	平均	9.22	11.05	10.63	8.99	9.97	9.88
	S D	3.17	4.07	4.73	3.61	3.22	3.10

支配 (厳格) とは, 子どもの気持ちとは関係なく, 一方的に親の考えている枠の中に押し込もうとしている, あるいは, 常に子どもを親の監督下に置き厳しい命令と禁止で縛っているということに子ども自身が受け止めているということである。

各平均得点について, 2 (厳格危険群・厳格安全群) × 6 (叱り方) の 2 要因分散分析を行ったところ, Table 6 に示すように親子関係において主効果がみられ, 厳格危険群の方が安全群よりも反発度が高く ($F = 8.410$, $df = 1\ 160$, $p < .01$), また, 叱り方の効果が有意であった ($F = 16.674$, $df = 5\ 800$, $p < .001$) が, 両要因間には交互作用は見られなかった。

Table 6 支配（厳格）における分散分析表

要因	df	平方和	平均平方	F 値
親子関係(A)	1	466.70	466.70	8.41*
個人差(S)	160	8878.64	55.49	
叱り方(B)	5	476.66	95.33	16.67***
A × B	5	6.27	1.25	0.22
S × B	800	4573.85	5.72	

* p<.05 *** p<.001

次に、支配（期待）に関して、期待危険群・期待安全群と叱り方6パターンの各組み合わせごとに、人数・叱り方に対する反発度の平均得点・標準偏差を示したのがTable 7である。

Table 7 支配（期待）における叱り方に対する反発度の平均得点と標準偏差

要因	df	平方和	平均平方	F 値
親子関係(A)	1	466.70	466.70	8.41*
個人差(S)	160	8878.64	55.49	
叱り方(B)	5	476.66	95.33	16.67***
A × B	5	6.27	1.25	0.22
S × B	800	4573.85	5.72	

* p<.05 *** p<.001

各平均得点について、2（期待危険群・期待安全群）× 6（叱り方）の2要因分散分析を行ったところ、親子関係において主効果がみられ、期待危険群の方が期待安全群よりも叱り方に対する反発度が有意に高かった（ $F=9.197$, $df=1/123$, $p<.01$ ）。また、叱り方の効果も有意であった（ $F=10.480$, $df=5/615$, $p<.001$ ）が、交互作用はみられなかった（Table 8）。

Table 8 支配（期待）における分散分析表

要因	df	平方和	平均平方	F 値
親子関係(A)	1	470.65	470.65	9.20**
個人差(S)	123	6294.27	51.17	
叱り方(B)	5	322.38	64.48	10.48***
A × B	5	30.49	6.10	0.99
S × B	615	3783.78	6.15	

* p<.01 *** p<.001

支配（期待）とは、よその子と比べて競争心を煽ったり、親の野心を子どもに達成させようとしたりするなど、子どもに対して高い期待をかけ、子どもの気持ちや能力にかまわず親の期待する方向へ引っ張っていかうとするような態度で親が子どもに接していると子ども自身が受け止めているということである。

拒否（（非難）・支配（厳格）・支配（期待）は三つとも同じような反応結果を示した。たとえば Fig.2 は、拒否（非難）の結果を図示したものであるが、危険群の方が安全群よりも親の叱りに対して反発度得点が高い。これと同じ傾向は支配（厳格）や支配（期待）でも認められる。

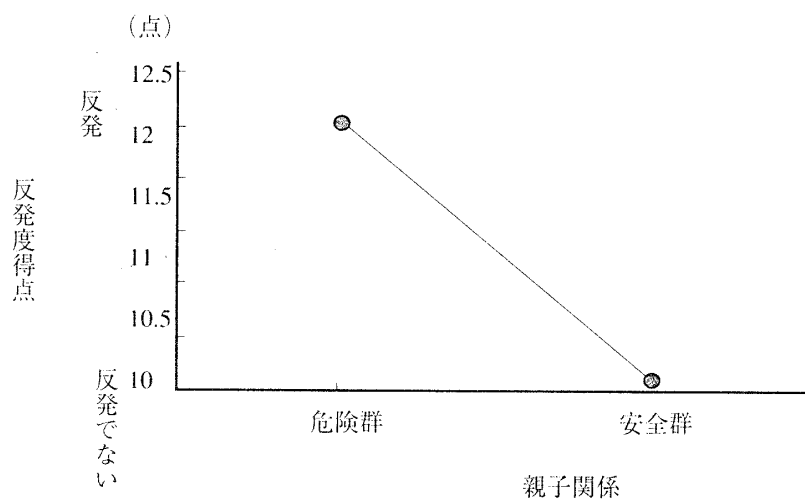


Fig.2 親子関係の違いが反発度に及ぼす影響－拒否（非難）

また Fig.3 は、支配（厳格）において叱り方の違いが反発度得点にどのような結果を及ぼすかを示したものである（危険群と安全群の平均値）。「人格評価」・「突き放し」が「理由説明」・「感情」

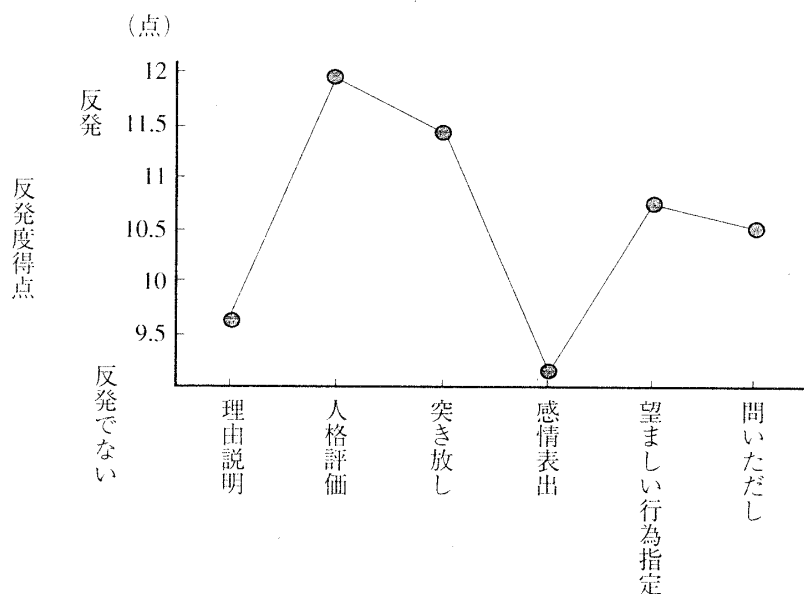


Fig.3 親子関係の違いが反発度に及ぼす影響－拒否（非難）

表出」「問いただし」よりも、叱りに対する反発度得点が有意に高く、親から人格を悪く評価されることや、“勝手にしなさい”と突き放されることに対して子どもたちは強く抵抗を感じていること、また、「感情表出」や「理由説明」はいずれも反発が有意に低いことも、この三領域にまったく共通に見られる特徴である。

3. 保護（心配）

TK式新親子関係診断検査の心配危険群・心配安全群と叱り方との各組み合わせごとの人数・叱り方に対する反発度の平均得点・標準偏差を示したのがTable 9である。

Table 9 保護（心配）における叱り方に対する反発度の平均得点と標準偏差

		叱り方					
		理由説明	人格評価	突き放し	感情表出	望ましい行為指定	問いただし
危険群	人数	31	31	31	31	31	31
	平均	8.94	10.42	10.03	7.35	10.58	9.68
	S D	3.29	3.41	4.46	3.19	3.92	3.61
安全群	人数	97	97	97	97	97	97
	平均	10.14	11.95	11.27	10.03	11.22	10.64
	S D	3.43	4.32	4.74	3.95	3.56	3.21

この表に基づき、各平均得点について2（心配危険群・心配安全群）×6（叱り方）の2要因分散分析を行った結果、親子関係において主効果がみられ（ $F=4.553$, $df=1, 126$, $p<.05$ ）、また、叱り方においても主効果がみられ（ $F=13.493$, $df=5, 630$, $p<.005$ ）、この両要因間には交互作用の傾向もみられらた（ $F=1.916$, $df=5, 630$, $p<.10$ ）（Table 10を参照）。

Table 10 保護（心配）における分散分析表

要因	df	平方和	平均平方	F 値
親子関係(A)	1	266.32	266.32	4.55*
個人差(S)	126	7369.68	58.49	
叱り方(B)	5	410.32	82.07	13.49***
A × B	5	58.28	11.66	1.92+
S × B	630	3831.61	6.08	

+ $p<.10$ * $p<.05$ *** $p<.001$

そこで、次に各要因ごとの単純主効果検定を行った。Fig. 4は、各叱り方における心配危険群と心配安全群の反発度の違いを示したものであるが、これまで見てきた領域における結果と反応が完

全に逆転している。つまり、心配危険群のほうが心配安全群よりも各叱り方に対する反発度が低いのである。

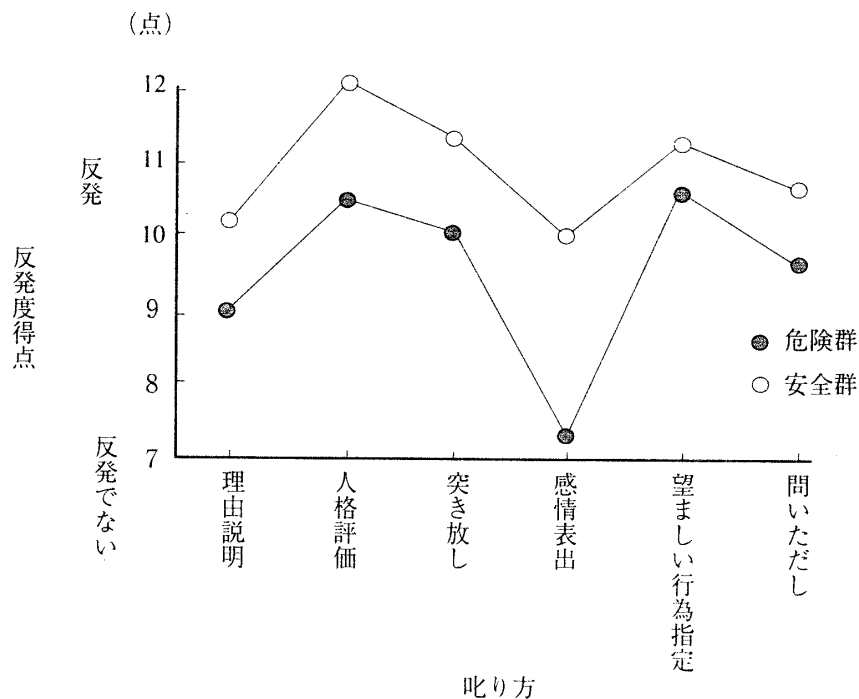


Fig. 4 親子関係と叱り方の違いが反発度に及ぼす影響—保護（心配）

保護（心配）とは、子どもの健康、安全、成績、交友関係などに多大な心配をし、むやみと手をかけ保護をする親である、と自分の親を認知する傾向の強い子どもである。「理由説明」・「人格評価」・「感情表出」の三つの叱り方において心配安全群の方が心配危険群よりも反発度が高かった。つまり、日頃から親が自分に対してもやみに心配し、手をかけすぎ、過保護に接していると感じる傾向の強い子どもは、叱りに対する反発が低いのである。特に「感情表出」ではそれが顕著である（ $P < .001$ ）。もともと「叱る」という行為は過保護と反対の性質を持つものであるから、親の過保護的働きかけに日頃から抵抗を感じていた子どもは、親の叱りをかえって素直に受け止めることができたと考えられる。心配危険群の「感情表出」で反発度が特に低かったのも、親からストレートに感情をぶつけられたことが、却って素直な気持ちでの受容に結びついたのであろう。

心配安全群では、「人格評価」が他のすべての叱り方よりも反発度が高かった。親をうとうしく思っていない子どもでも、叱られるときはやはり、望ましくない行動そのものを直接叱ってほしいのであり、人格に結びつけた叱り方は反発を生むようである。

4. 保護（干渉）

干渉危険群・干渉安全群と叱り方6パターンの各組み合わせごとの人数・叱り方に対する反発度の平均得点・標準偏差を算出したのがTable 11で、これをもとに2（干渉危険群・干渉安全群）×

Table 11 保護（干渉）における叱り方に対する反発度の平均得点と標準偏差

		叱り方					
		理由説明	人格評価	突き放し	感情表出	望ましい行為指定	問いただし
危険群	人数	71	71	71	71	71	71
	平均	9.69	10.87	10.90	8.86	10.01	10.72
	S D	3.43	3.85	4.32	3.63	3.42	3.48
安全群	人数	99	99	99	99	99	99
	平均	9.77	11.74	11.09	9.75	10.84	10.31
	S D	3.31	4.00	4.64	3.75	3.44	3.08

Table 12 保護（干渉）における分散分析表

要因	df	平方和	平均平方	F 値
親子関係(A)	1	39.67	39.67	0.72
個人差(S)	167	9146.04	54.77	
叱り方(B)	5	472.48	94.50	16.45***
A × B	5	59.55	11.91	2.07 ⁺
S × B	835	4796.91	5.75	

* p<.10 *** p<.001

6(叱り方)の2要因分散分析を行った結果を示したのがTable 12である。

保護(干渉)とは、子どもに失敗させないようにと、口うるさく指図したり、すぐに手をかしてやったり、こまごまと世話を焼いたり、子どもに責任を持たせて見守ることができなかつたり、というような態度で親が自分に接していると子ども自身が感じていることである。これまでと同様な分析を行った結果を示したのがFig.5であるが、すべての叱り方において干渉危険群と干渉安全群の間に反発度の差はみられなかった。

干渉危険群では、「人格評価」・「突き放し」・「問いただし」が、「理由説明」・「感情表出」より反発度が有意に高かった。「人格評価」や「突き放し」は、望ましくない行為そのものへの注意や評価ではなく、人格を悪く評価したり、親から突き放したりするものであり、他の関係領域でもこれに対する反発は高かった。「問いただし」は、疑問表現の形式はとっているが必ずしもその答えを子どもに要求しているわけではなく、問いただす以前に当該行為についての親の判断は定まっておき、「当然子どももそれについて知っているはずである」と期待している叱り方である。親が自分に対して過干渉であると感じている子どもでは、「どうして～しないの?」というような、その言

葉の裏に「それぐらい自分で判断できるでしょう?」というようなニュアンスの込められた「問いただし」の叱り方は、より強い反発を生むのであろう。

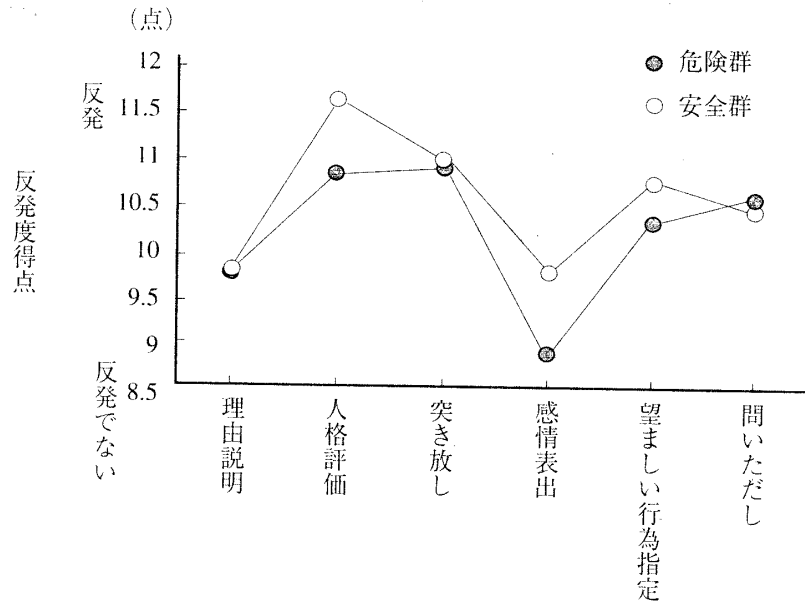


Fig.5 親子関係と叱り方の違いが反発度に及ぼす影響—保護（干渉）

おわりに

以上みてきたように、子どもは、普段からの親の自分に対する態度や関わり方から色々なことを感じ取っており、日常の“叱られる”という場面でちょっとした叱りことばの違いに敏感に反応している。とくに「人格評価」・「突き放し」といった、自分の人格そのものを否定されるような叱り方や、親の保護や援助を打ち切るようなことを含意し、突き放すような叱り方には、多くの子どもたちが強く反発するようである。逆に、「感情表出」・「理由説明」といった、なぜ叱られるのかということが明らかにされるような叱り方や、子どもの望ましくない行動を親が残念に思う気持ち、または悲しく思う気持ちをストレートに表現するような叱り方が受け入れやすいようである。ただし、「感情表出」に関しては、子ども自身が親から愛されているという気持ちを持っているか否かで、その受け取り方は違ってくる。

参考文献・引用文献

- 遠藤由美・吉川佐紀子・三宮真智子 1991 親の叱りことばの表現に関する研究 教育心理学研究
第39巻 第1号 85-91
- 藤田敦・丸野俊一 1992 親の叱りことばの受容過程における子どもの状況認知の役割 九州大学教育学部紀
要(教育心理学部門)第37巻 第2号 133-142
- Park, R.D. 1970 The role of punishment in the socialization process. In R.A. Hoppe et al. (Eds.),
Early Experiences and the Processes of Socialization. Academic Press.
- 三宮真智子・竹内史宗・遠藤由美 1990 小学生の教師に対する好悪感情と叱りことばの認知
日本教育心理学会第32回総会発表論文集 306
- 三宮真智子・竹内史宗 1991 小学生の叱りことばが形成する教師の印象 日本教育心理学会第33回総会発表
論文集 337-338
- 竹内史宗・三宮真智子 1989 “叱られ”経験の認知について(1)・(2) 日本教育心理学会第31回総会発表論文
集 280-281